

# 排泄、その豊かな世界

井原成男



排泄は、普通汚いものを連想させますが、実はとても健康で、自然な行為です。子どもの日常と自然に接する保育学は、こうした感覚を理解することのできる、現実的で豊かな学問であると私は常々思っています。編集部からせっかくの機会をいただきましたので、そうしたことを踏まえて、排泄の意味を考えてみたいと思います。

## 心を解放したうんち散歩

排泄物は子どもの、愛する人へのプレゼントだという考え方があります。これは、子どもがうんちをする、すると母親は「いっぱいだね。よかった

ね」と心から喜ぶ。こんなふう喜んでもらえるのと、子どもにとっては「こんなに喜んでもらえるなんて、ボクはお母さんになって素晴らしい贈物をしたんだろう、この次もウント大きいのをドッサリして、お母さんにもっと喜んでもらおう」と感じるという意味です。

これは、汚いものが自然に受け入れられていた幼い日の、とらわれのない時代を思い起こさせます。こうした行為が、母親という、子どもにとっては全世界に匹敵するものに受容されるか、あるいは拒否されるかは、その子どもにとって、その人生観にとって、大きな意味の違いを生み出すでしょう。

私自身はうんちのしつけをかなり厳しくされ、そのせいか、母親が尻を拭いても、「もつとカタク」と要求するほどのきれいい好きになりました。そのせいか、私はうんちがどうも嫌いです（うんちの好きな人などいないですけれど）。

娘が生まれ、四、五日うんちが出ないことがありました。まとめて何日分が出るときは、パンパンに詰まって堅くなっています。痛くて大変な騒ぎになる。痛いので泣く、運動するとうんちは出やすくなるので、たとえ、冬の寒い日でも、うんち散歩と称して、二人で散歩に出ました。出そうになって、おうちですと言いつ張る娘に、ワンワンも外でするか、かまわないと言いつ聞かせました。そんな思いをして、やっと出たうんちはとても大切で、トイレに流せないほど大切で、思わず代々の家の宝にしたいくらいでした。私はこの育児体験を通じてやっと、うんちは汚いという感覚から解放されたのです。私は育児をしつつ、わが子からプレゼントをもらった

といえるでしょう。

こうした感覚をつかんでおくことは心理臨床家として、とても大切です。神経症的な傾向の潔癖な子には、うんちのしつけに象徴されるような「しつけ」が厳しすぎたために、親にしつけられた厳しさがいつの間にか、その子自身の感覚にまでなってしまうている子が多いのです。こうした子どもたちの治療は、潔癖性を和らげていくことです。このとき、私たちの潔癖性が強すぎると、子どもに与える影響が、説得力のないものになってしまいます。私たちは自分の、うんち的なものに対する感覚を自己点検しておくことが大切です。

### 分離された「汚さ」

ところで、九州や沖縄地方に行くと、今でも便所が家と分離された所にあるのに出会います。私が小さいころにも便所が家の外にある家が結構ありました。多分、便所のことを「御不浄」というように汚

いもの象徴として、家（母屋）から分離させ、遠ざけていたのだと思います。それがだんだん家の中に入ってきて、子どもにとってはかなり楽になってきました。

夜、家の外の便所に行くことは大変恐ろしいことでした。けれど、家の中に入ってきたとはいえ、それでも今の水洗便所とは違い、深く蛆のわいた「穴」は恐ろしいものでした。この中に落ちたら確実に糞にまみれて死ぬなどという恐怖です。学校の便所はさらに恐ろしい場所で、うんちをするとドボンと「おつり」が返ってきて、逃げ惑います。私も夜、便所に行くのが怖くてこっそり縁側からしたものです。便所は恐ろしく遠ざけたものでしたが、思い出を呼び起こす、懐かしくも豊かな生活のにおいに満ちた場所でした。

### 汚さやにおいの排除

水洗便所が普及して、様相は一変します。初めて

の万国博が大阪で開かれたとき、田舎から来た人が、トイレがきれいなので、そこでお弁当を食べたという笑い話を聞きました。トイレの水洗化によって再び、うんちは巧妙にかつ完璧に私たちの視野から遠ざけられます。うんちをし終わってから水を流しますが、きれい好きの人はうんちの真の姿を確かめることもなく即座に流してしまうのです。本当は、ご苦労さんと、ねぎらってやらねばならないのにです。

こうした事態と、現代のさまざまな事実や背景をなす現代的事件を、直接的に結びつけるのは無謀ですが、それを承知で、そうしないではいられません。現代的な病理を貫くテーマとして、この「汚さの完璧な排除」ということが挙げられるからです。

たとえば、神経症的な登校拒否の極端な完全癱や、その子の性格形成の家族的な背景となった母親や父親の完全癱は、その人の中にある、よくない部分としての怒りや批判精神、あるいは攻撃性を、完

壁に排除した結果です。こうした人々にとつて、このよくない部分（悪い子の部分）が現れることは何としてでも避けなければならない。しかし、つまりきをきつかけにして頭をもたげた怒りと自己主張は、もはや「よい子」でいることを断固として拒否します。そう考えると、もはや戻れないよい子としての自分にしがみつくと絶望的な努力が強迫症状だといえます。

このよくない部分の排除という機制は、汚い物（＝うんち的なもの）の排除に似ていないでしょうか。いわゆる「登校拒否」を起こして学校のコースを外れてしまうということは、ほかの人から、ダメなやつというレッテルを貼られ、排除されるということ、その上ダメ人間で、通常の人生コースを外れたもの（学校は一つの選択にすぎないと思います）が、現実には全てであると信じられていますし、悲劇的なことには、当の子ども自身が一番そう信じています）として、自分自身の自己評価を下げ、自分

自身を排除してしまうことになります。

### うんちという豊かなもの

栄養学の教えるところでは、うんちにはまだ十分に栄養が残っているということです。人間は食物のもつていた栄養分の20%しか吸収しておらず、うんちの中には、まだ使える部分が十分残っているのです。室町時代のころには、便所の古語である「厠」が示すように、私たちは川の上でうんちをしています。そしてうんちは川に住む魚たちの食物として役立っていたのです。また現代でも、中国では「豚便所」と称するものがあり、人間のしたうんちは豚の栄養になるそうです。私たちの幼いころは、野菜などの農作物の肥料として、直接うんちをかけていました。畑は臭かったものですが、ウンコキャベツはおいしいのです。

こうしてみると、排泄物というのは決して、汚く、排除すべきものではなく、まだまだ役に立つも

のだというイメージが浮かび上がります。

こうした事実を現代において、じかに呼び戻すのは、小さな子どもの子育てです。わが子のだからかもしれないませんが、子どもとの格闘を経て、うんちというのはそう汚いものではないということがわかってきました。これは私にとって驚きの出来事でした。汚さというものは、現実や経験ではなく、これもまた植えつけられた観念なのです。

また、場所としてのトイレは人が安心して一人でも孤独に思考にふけることのできる場所です。武田信玄は愛用の広い御閑所（便所）をもち、この中で思索にふけたといえます。ここは安全な場所です、お付きの者にも邪魔されず心行くまで孤独になれる場所であったに違いありません。私たちにとっても便所は、孤独に心置きなく一人になれる場所です。子どもの発達をみているとわかるのですが、はじめ子どもはトイレの戸を開けたまま、外に母親が見ているのを確認しつつ用を足します。けれど、やがて恥

ずかしいという気持ちが起こり、戸を閉めてくれと言うようになります。この時期は、子どもが母親から少しづつ分離し、離れていられるようになる時期と一致します。分離不安の強い子は当然このプロセスが遅れますし、また何かの事情で不安が強くなると、一人でトイレに行けなくなったり、母親を一人でトイレにも行かせない事態が起こります。トイレで孤独を楽しめるといえるのは、人の自立と安心感の指標なのです。登校拒否になると最後のとりでとしてトイレに立てこもることが多いですが、これこそ子どもが母親から自立しようとしている象徴的な行為でしょう。

こうしてうんちへのプラスイメージをつくることは、子どもの汚い物へのこだわりを和らげるのに役立つに違いありません。排泄という、一見汚いものへのイメージを変えることは、私たちの心を限りなく豊かにしてくれるのです。

（お茶の水女子大学大学院）